

研究専門部会長

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 直人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4315

【研究専門部会長所見】

最後の情報科学センター研究専門部会長として

理工学部 阿部 直人

情報科学センターから教育部門が「教育の情報化推進本部」へ移行して本格的に情報科学センターの改組の話が持ち上がってきました。順調にいけば本年度で情報科学センターは十数年に渡る役割に一応の終止符が打たれる予定です。そこで2年数ヶ月に渡る研究専門部会長としての感想をここに述べさせていただきます。

情報科学センターから教育専門部会が無くなり、組織的には研究専門部会のみが残った形になっていますが、この1年を振り返ると、研究専門部会の活動は必ずしも名称のような「研究」を行ってきているとはいえません。理工学部において「研究」というと、科研費に代表される学内外の競争資金を獲得し、研究計画の基に（競争資金はある程度の実績が問われるために必ずしもこの言い回しが正しいとは言い切れないが）研究を遂行し、その結果を論文などで公表する、というのが一般的です。

しかし、情報科学センターにおける「研究」とはそれとはずいぶん異質な感じがしています。「研究支援」という方がその活動内容からは正しいかもしれません。かつて、計算機が高価で共同の資産であった時代ならともかく、現在のように世帯あたりのパソコン普及率が68%を超える（内閣府調査の数字だが、大学の学生・教職員に限るとさらに高い比率だと思われる。）と計算機としてのハードウェアではなく、ソフトウェアの供給が「研究支援」と言えるでしょう。理工学部ではまだパソコン以外の計算機としてのハードウェアの需要があることを付け加えておきます。情報科学センターが改組されたとしても現在行われている「高額ソフトウェア」の制度は維持していかなければなりません。

文系における高額ソフトウェアにおける「研究支援」となると、最近ではデータベース利用の申請が増えてきました。これは本来の高額ソフトウェアの趣旨からは少々はずれるために、申請があるたびに苦慮してきました。図書館または社会科学研究所などが中心となつて、どのようにしたらよいか本格的に検討していただきたいと思います。

高額ソフトウェアの予算で購入された各種ソフトウェアは、近日中にホームページで公開する予定となっています。多くのソフトウェアが買い取りではなく、年間の維持費がかかる契約形態に移行してきています。新規のソフトウェアばかりではなく、既存のソフトウェアをより多くの教員・学生が有効に活用していただくためには、各種ソフトウェアの利

用講習会などを行う必要があると感じています。興味があるソフトウェアの使い方がよくわからない、という方は是非とも各地区システム課へ一度相談していただきたいと思います。

計算機やネットワークが特別な物であった時代から、パソコンとインターネットが身近なインフラとなってきた昨今では、情報科学センターの役割そして研究専門部会の役割も日々変化してきています。明治大学としてのあるべき情報環境を教育面も含めてしっかりと考え、研究者にとって必要となる支援をタイムリーに提供していくことは、情報科学センターがどのように改組されようとも、大学にとって重要であることを、あえて強調しておきたいと思います。